

CMA+PBダブル資格者に聞く、 プライベートバンカー資格

超高齢化社会に突入した日本では、相続や事業承継といった課題に直面する富裕層・企業オーナーも多く、このような課題に取り組むプライベートバンカーの存在は、近年欠かせないものとなっています。

事業全体の流れをつかみ、その分析やビジョンの立て方、差別化の方法、上場企業の財務諸表からリスクを読み取る識別眼、アナリストレポートで駆使される会社の意図を投資家に伝えるための表現方法など、証券アナリストの観点や経験は、企業オーナーへのコンサルティングはもちろん、あらゆる分野で生きるスキルです。

CMAでありかつPB資格を取得された会員の皆様にご登場いただき、受験の経緯やダブル資格の活用、また受験した感想等について、お話を伺います。

1. CMA受験のきっかけ

CMAの取得を目指したのは所属部長であった54歳

CMAの取得を目指したのは、証券会社で公共法人部長だった54歳の時でした。きっかけは当時の上司であった担当専務の「これからの証券マンはCMAくらい取れ。部長も含めて全員が対象だ」という要請でした。

国内営業・MBA留学・海外営業・スイスでの引受など長年多くの業務を担当してきて、実践経験には誰にも負けない自信があったのですが、いざ証券アナリストのテキストをめくって見てみると、案外難しい内容なのに驚きました。社内での対策講座も活用しながら、1次レベルは1度で合格し、2次レベルは2度目に合格しました。

“わかってたつもり”が、そうではなかったことを改めて自覚

勉強してみて、目を開かされました。多くの分野の7-8割は何となくは理解していましたが、すべての必要知識をきちんと把握していたわけではないことに、改めて気づかされました。金融の世界に身を置く者として、必要なファイナンス・分析の知識を遅まきながらも体系的に取得でき、自分にとって良い機会となりました。

その後、取締役として系列のシンクタンクに転勤となり、最後はアナリストを束ねる立場となりますのですが、その前にCMAを取得していたことは結果的に正解だったかと思います。



スハラFPコンサルタント

須原 國男 氏

シニアPB

2. 天国と地獄を見た証券会社・シンクタンク時代

海外機関投資家の日本株買いと日本企業の海外起債に立ち会う

自身の証券会社時代のキャリアを振り返ると、まさに天国と地獄の両方を味わった感があります。

大学卒業後営業店を経て、留学しMBAを取得、そのままNY・ロス支店・ロンドン支店で海外の機関投資家向けに日本株のセールスを担当していた頃は、日本経済が右肩上がりの時代でした。

その後、日本企業が盛んに海外市場で起債したバブル前夜の頃に、スイス現地法人に社長として赴任し、年間100社以上の起債を手掛けました。その時代は調印式に出席するために日本から来られる発行企業の方々を、頻繁に空港まで迎えに行くなど多忙ながらも充実した日々でした。

スイス法人でリストラを断行、アナリストランキングで改革

しかし、良い日ばかりが続くことはありません。バブルがはじけ、スイス現法の陣容も3割減にせざるを得ず、それまで仲間として働いてきた現地スタッフにリストラを言い渡さなければならない、厳しい役回りも回ってきました。

帰国後、外国株式部長、公共法人部長を経て前述の通りシンクタンクの取締役となりましたが、その頃の所属先は日経アナリストランキングで8位と低迷の状況でした。

「シンクタンクのアナリストランキングが低い」ことがグループ部店長会議でもたびたび槍玉に挙げられるような状況でしたので、相当の覚悟を持ってリサーチ本部長になった記憶があります。

幸い改革を断行してから半年後にアナリストランキングは3位まで上がり、その1年後は2位、そしてついに私の退職直後に1位を獲得しました。この体験は「努力すれば何とかなる」と私のその後の人生で大きな自信となっています。

シンクタンクを定年退職後、不動産証券化会社に常務として就職し5年間不動産証券化業務に従事しましたが、リーマンショック直後にその会社を去りました。

3. コンサルタントとして社会貢献を

60代半ばでCFP資格を取得

以前から将来はコンサルタントとして社会貢献したいという夢を持っており、最初は経営コンサルタントを目指しましたが、自分のところに相談事として持ち込まれるのは退職金等の運用相談ばかりで、経営の相談を持ちかけられることはありませんでした。そこで一念発起。CFP資格を60代半ばで取得し独立、資産運用、遺言・相続、ライフプランサービスをメインとした現在のFPオフィスを開業しました。

独立して3、4年もたつてくると、徐々に富裕層の顧客ができ始め、これまでのFP知識に追加すべきスキルの必要性を感じていたところに、アナリスト協会がPB資格制度を開始することを知りました。

実はスイス現法で社長だった頃に現法でスイスの銀行ライセンスを取得、本社も「これからはプライベートバンキングの時代だ」と本格的なPB業務を目指していたことがあり、PBとは少なからぬ縁が以前からありました。

富裕層顧客ができ始め、必要を感じシニアPBを取得

まずプライマリーPBのコンピュータ試験を受験して合格しました。シニアPBの挑戦に当たっては一足先にシニアPBを受験した知人からは、かなり大変な試験と聞いておりましたので、できるだけ答案作成に時間を割けるようなスケジュール調整を行いました。運よく筆記試験も何とか合格することができました。

証券会社時代のキャリアでは上場企業が相手だったため、中小企業オーナーファミリー全体の幸せ実現のために何をすべきかといったPBプログラムの学習内容は、大変役立ちましたし、また現役プライベートバンカーとして活躍しているPB教育委員の先生方の講義も、生きた実践的な内容で、毎回目の覚める思いで受講しています。

PB資格を取得すればブルーオーシャン

当FP事務所を初めて訪れる顧客は、CFPの検索システムやホームページがきっかけとなっているようですが、自分のプロフィールにあるシニアPBについて説明しますと「選ばれた資格保持者である」との良いイメージを持っていただけて、信頼感がより高まると感じています。

CMAの方の多くは、企業に所属する専門職の方が多いかと思いますが、退職したらそれで終わりではせっかくこれまで積み上げたスキルがもったいないかと思います。次のセカンドライフを考える上で、PB資格の取得にも一度目を向けられてみてはいかがでしょうか。

PB資格者はまだ人数が少ないということで知名度のアップはこれからですが、逆に、資格者が多くて誰でも取得している状態に比べて、まだあまり手がつけられていないと考えれば、PB資格の取得はリスクの小さいブルーオーシャン状態とも言えるのではないのでしょうか。

自分の事務所では一切金融商品の販売を行っておりません。これからも、顧客のリスクを勘案しながら、安心して相談して頂けるコンサルタントを目指して、日々努力していきたいと思います。

★「CMA+PBダブル資格者に聞く」バックナンバーは、下記URLからご覧になれます；

http://www.saa.or.jp/pb/for_enrollee/index.html